

今、宮工生に考えて欲しいこと

宮城県工業高等学校校長 西尾 正人 先生

【インタビュー】新聞部 インテリア科二年 安藤 なつみ

一年の始め、一月八日の集会で校長先生から、「AI vs 教科書を読めない子供たち」(新井紀子氏 国立情報研究所教授 東口ボくんプロジェクトの研究)のお話をいただいた。

AIと聞くと、どんな賢くなり、最近はお笑い分野にもAIが進出と聞くと万能であるように感じる。これからの私たちに未来はあるのだろうか。以下は一月八日のお話のあらましである。私の不安に答えをくれたような内容であったと思う。

今後の世界は、ビックデータの中AIの発達の中で大きく変化していく。それは、確かである。AIは、意味を理解しない。ビックデータから一番答えに近い回答を選ぶことができるが、考えることはしない。今、求められている人材は、深く意味を理解し、その上でのコミュニケーション力を持つ者である。

基礎的読解力の現状は、すべての能力に関係している。そこで、新井紀子さんは深く理解する力を本格的に調査された。例えば、次の文章の内容は同じだろうか。

「幕府は、一六三九年、ポルトガル人を追放し、大名には沿岸の警備を命じた」と「一六三九年、ポルトガル人は追放され、幕府は大名から沿岸の警備を命じられた」

中学生は57%、高校生71%の正答率だった。感覚で回答している部分が多く、漢字が読めない。

校長先生は、県工の生徒も「深く物事を理解し行動ができていくのだろうか?」と大きく心に刺さったそう。そして、改めて未来に羽ばたく一歩を経験することができる学校作りを目指し続けていくこと、輝かしい未来に向けて気持ちを新たに取組んで行きたいと思ったそうである。今年、平成最後の年となる。この新しい年を一緒に迎えられることを率直に感謝し、今年一年、一つでも多くの感動・「心動く機会」が多くなることを願い、私たちに話をしてくださいました。この話を伺って

私は、将来の事が気にかかった。このまま深い意味を理解できないままであつたら私たちの代わりAIがたくさんの事をするようになるかもしれない。自分で考え、深く理解できるようにするために、本を読み、考えることがきっかけになるかもしれない。校長先生は集会でのお話に自分が読んだ本の話をしてくださることがある。そこで、今の私たちに読んで欲しい本を伺った。

一冊目は、『嫌われる勇気』(岸見一郎、古賀史健 著)。校長先生がおっしゃるには、「人は変われる」。人がこのままで良いと本当に感じて実感できていないならば変わるべきである。与えられたものが重要なのではなく、与えられたものをどのようを使うかが重要だと思わせられるそう。

二冊目は、『NASAより宇宙に近い町工場』(植松努 著)。この本は、北海道の田舎の町工場を舞台にしており、期待され



▲紹介していただいた本の一部

三冊目は、『サピエンス全史』(ユヴァル・ノア・ハラリ 著)。本の内容は、人類の歴史。昔から人類は集団で助け合っていたが動物が食べ残した骨髄をすすするほど弱く、動物の頂点ではなかった。ライオンなど頂点にいるものは、長き年月をへて進化し、周りの環境もそれに追従してきた。四十万年前から十万年前の人類は、生態系が順応できない早さで独裁者になった。そして、人類は戦争や環境などによって多くの種の絶滅に関与してきた。その事を知り私は、この本に興味を持った。

四冊目は、『世界でいちばん貧しい大統領からきみへ』(くさばよしみ 著 元ウルグアイ大統領のホセ・ムヒカの絵本)。ムヒカ元大統領の人生についての内容だった。校長先生に教えていただいたスピーチを聞き貧富の差について考えさせられた。校長先生は、集会の度に自分が読み聞きし、心を動かされた事について話しているそう。その一回一回を大切に、心を込めている事に私は感動した。皆さんもこの心のこもったお話に耳を傾けて、自分で考え、深く理解できるようにして欲しい。

なかつたロケット開発が数々の困難を乗り越え、アメリカ合衆国のNASAにも注目される事業となっていく本である。感想を伺って、案をするというところ↓未知の経験を経て通る↓能力がつかない↓自信がなくなる↓自信がない人↓他人を低く評価し自信を奪う↓最後の人(優しい人は他人の自信を奪えない)つまり自分の自信を奪ってしまふ。という負の連鎖が印象に残った。

三冊目は、『サピエンス全史』(ユヴァル・ノア・ハラリ 著)。本の内容は、人類の歴史。昔から人類は集団で助け合っていたが動物が食べ残した骨髄をすすするほど弱く、動物の頂点ではなかった。ライオンなど頂点にいるものは、長き年月をへて進化し、周りの環境もそれに追従してきた。四十万年前から十万年前の人類は、生態系が順応できない早さで独裁者になった。そして、人類は戦争や環境などによって多くの種の絶滅に関与してきた。その事を知り私は、この本に興味を持った。

今年度も沢山の生徒が、多くの検定や資格試験に挑戦しました。今年度の傾向として、個人で希望し受験している資格については合格者数が増えています。が、その反面、クラスまたは学年全員で受験する資格試験の合格率が下がっています。ただし、ほとんどの生徒は、進路のしおりに掲載されている【講習・資格検定試験等の実施予定表】を利用するなどして、年度当初から計画的に取り組むことが出来たようでした。

まだ今年度の最終集計が終わっていませんが、資格取得状況の一例を示すと、電気工事士は、第一種と第二種を合わせて百二十六名が合格しています。この資格は電気科が中心となつて受験していますが、他科の生徒も合格していますので興味がある人は挑戦してみるのも良いと思います。その他にも、ポイラー取扱者技能講習に参加したり、ITパスポート、基本情報技術者、危険物取扱者といった国家資格にも積極的に挑戦していただきました。特に危険物取扱者において

今年度の資格取得状況について

資格取得委員

では、乙種全類合格というのを、化学工業科の生徒が一達成しました。これは今年度ではなく、高校三年間の結果だと思っています。

ジュニアマイスターの称を得るために努力を重ねた人山いたようです。この「ジュニアマイスター顕彰制度」は、全国工業高等学校長が資格・検定・コンテスト易度により、Sクラス→三Aクラス→二Aクラス→二Bクラス→二Cクラス→二Dクラス→二Eクラス→二Fクラス→二Gクラスという区分付け、取得した合計点に上定する制度です。二十点以上でジュニアマイスターブロンズ三十点以上でジュニアマイスターシルバー、四十五点以上でジュニアマイスターゴールドが認定されます。学校で力・申請方法を丁寧に教えますが、インターネットるウェブ申請なので、好きに自宅でも申請ができましかし、申請作業・操作をしく感じたり、すでに進路

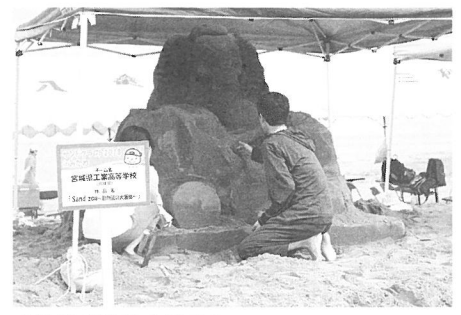
ジュニアマイスター顕彰 認定者数

年度	学科名	ゴールド	シルバー	ブロンズ(20点以上)	計	特別表彰
平成14年度	全学科	2	26		28	
平成15年度	全学科	1	19		20	
平成16年度	全学科	6	19		25	
平成17年度	全学科	12	29		41	
平成18年度	全学科	11	31		42	
平成19年度	全学科	14	28		42	0
平成20年度	全学科	17	26		43	3
平成21年度	全学科	14	33		47	5
平成22年度	全学科	8	22		30	0
平成23年度	全学科	4	14	10	28	1
平成24年度	全学科	3	23	4	30	0
平成25年度	全学科	15	24	1	40	1
平成26年度	全学科	4	10	0	14	1
平成27年度	機械科	2	4	0	6	0
	電子機械科	0	1	3	4	0
	電気科	1	1	2	4	0
	インテリア科	0	1	1	2	0
	化学工業科	0	0	0	0	0
平成28年度	情報技術科	2	1	0	3	0
	合計	5	8	6	19	0
	機械科	1	5	0	6	0
	電子機械科	1	2	5	8	0
	電気科	0	4	1	5	0
平成29年度	インテリア科	0	1	3	4	0
	合計	0	1	3	4	0

雪辱を果たす

～新たな連覇への第一歩～

美術部長 インテリア科三年 白津 新さん
【インタビュー】新聞部 インテリア科二年 神林 きら



▲砂像を削る白津さん

今回は美術部部長の、インテリア科三年白津新さんにお話を伺った。

白津さんは毎年夏に秋田県で行われる、砂像甲子園という大会に出場し、優勝した経験を持っている。

砂像甲子園、通称サンドクラフトは、三種町の恵まれた自然を生かし、環境省認定「日本の快水浴場 100選」の釜谷浜(かまやはま)海水浴場で繰り広げる砂の像制作展示である。内容としては、四角形に積まれた砂のかたまりを削って、各年

のテーマに沿って作品を制作する、というものだ。ちなみに今年のテーマはSand Zoo(砂の動物園)で、白津さんたちはSand Zooの動物園の大幅伯くという、象をメインとした作品を制作し、見事優勝を果たしている。検索すると出てくるので皆さんもぜひ見てみて欲しい。

大会の時の心境を伺うと、先輩方と同行した昨年のサンドクラフトは、大会優勝三連覇が期待されていた中、残念ながら優勝という結果を出すことが出来ず、三連覇とならなかった悔しい思いが出たので、「今年自分自身が頑張つて、先輩達の無念を晴らそう!」という思いで必死に取り組んだと答えてくれた。結果は優勝だったので、意気込み通り、先輩方の雪辱を無事果たせたのはすごいことだと思ふ。後輩達には、ぜひ二連覇を目指して頑張つてほしい。

自分はサンドクラフトという名前だけ知っていて、それがどのようなものなのか理解していなかったのだ、このように、自分の知らない事がまだまだ沢山

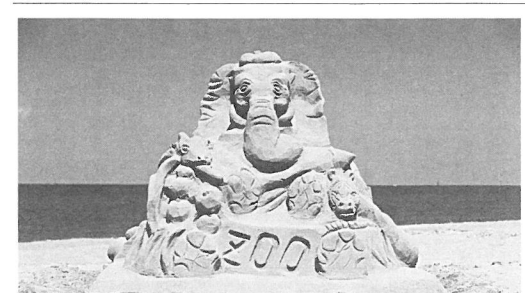


▲左から一森さん、大友さん、加藤さん、白津さん

あることをインタビューを通して感じる事ができた。そしてこの記事を通して、読者の方々にもサンドクラフトについても

つと知って貰えたらと思う。

次に美術部の活動について教えてもらった。美術部の活動は毎日あり、基本土日祝日はないが、展覧会前になると土日祝日もあるそう。まず大きいイベントだと年に二回の展覧会にむけての作品制作や宮工祭での展示を主に行っているそう。あとはみなさんご存知の通りのサンドクラフトに毎年参加している



らしい。普段はデッサンや、油絵、クロッキーをしているそう。自分の作品を完成させるため、遅くまで学校に残って作業を進めている美術部員を私はよく見かけるので、それぞれ見えないところで、毎日の積み重ねを頑張っているんだと感じた。また、こうした積み重ねが功績を残すのに必要なことなのだろう。

三年間の部活動を通して学べたことを聞いてみると、美術に関しても色々な新しい技術力が身についたのはもちろん、今まで知らなかった画材についての深い知識や、他の作品を見る目、今までは違う観点を身につけることができたこと。そしてなにより、自分の考えていることや、想っていることを上手く表現する力を身につけることができたことだとおっしゃっていた。今後、後輩達になにか期待していることはあるかと伺うと、期待といえるかどうかは分からないが、今年は部員を頑張つて増やし、賑やかな部活をつくること。そしてこれからもみんな仲

良く心を込めて作品制作に自分達の思いを繋げて貰んでくれると嬉しいですし、えてくれた。

毎年いろいろな面で功績している美術部さん。これも宮城県工業高校生としての造性豊かな素晴らしい作品づくり、様々な大会で活躍している。美術部さんの見功績を、新聞部として取りることが出来る日をお待ちしております。